

地域に根ざした施設を目指す

触れ合って

絆の杜

支えあって

第27号 平成22年3月30日

発行所

社会福祉法人 光道園

鯖江 福井県鯖江市和田町9
TEL (0778) 62-1234(代)
FAX (0778) 62-0890

朝日 福井県丹生郡越前町朝日22
TEL (0778) 34-1220(代)
FAX (0778) 34-2099



2月18日に寿司会が行われました。寿司職人の方に憧れ、帽子をお借りし喜びの表情を見せた1コマです。【ライフトレーニングセンター・療護一課】
(撮影・榮 晃彦)

主な内容

光道園園長挨拶……………P2,P3

第9回光道園公開セミナー……………P3

住み慣れた地域でいつまでも……………P4,P5

地域の陶芸家の指導で、新商品製作開始……………P5

目指せ！おむつゼロ特養！……………P6

待望のエレベーター・ナースコール……………P7

タイヘン たのしい……………P8

施設内研修を通じて……………P9

ボランティアとの絆⑤……………P10

平成21年度 生活支援事例報告会……………P11

新任職員紹介……………P11

笑顔がいっぱい！……………P12



「光道園第五期施設整備と復刻版書籍の発行」

光道園 園長 土肥 芳

「暑さ寒さも彼岸まで」と申しますが、当地の今年の冬は暖冬の予報で安心していました。平均気温だけをみますと平年よりも少し暖かく結果としては暖冬のような感じが、実際には年末年始と一月下旬には強い寒波の到来で積雪も多い時で四〇センチを超えて、除雪におおわらわのときもあり暖冬というよりも久しぶりに大雪だったとの印象でした。その雪も今は跡形もなく、春の日差しがまばゆい頃となり桜の開花時期が気になるような頃になりました。

養護老人ホーム・第一光が丘ハウスと養護（盲）老人ホーム・第二光が丘ハウスの改修工事も雪の影響もほとんどなく順調に進捗し、二月十二日（金）には本体の居住棟部分が出来上がるのを待つて、百余名のご利用者の方々が新居に引越しができ、新しい環境の下、生活をスタートしています。全室個室であり誰に遠慮することなく過ごせ、夜もゆったりと眠れますと喜んでいただいています。後は特別養護老人ホーム・第三光が丘ハウスとのつなぎの廊下とこれまで長年住んでいた居住棟の解体撤去工事と建物の外溝工事を残すだけとなり、三月二十六日（金）には竣工式を予定通り行うことになっています。

相前後して、養護老人ホームの改築に合わせて進めていました納骨堂の改築工事も二月八日（月）

に完成し、これまでのすこし騒々しい環境から、丹生事業所の北西の位置に移すことができました。

近くのお寺さまによりこれまで納骨された五百余名の尊い方々が祭られていました遺骨を含んだ土の部分を手掘り返し、新しい納骨堂に移し替える「開眼供養」（魂入れ）を職員が見守る中、厳かに執り行い無事終えることができました。

今後はこれまでと同様に、春のお彼岸法要は「彼岸の入り」から「彼岸の明け」までの中日の「春分の日」の午前中に近くのお寺さまにおいでいただき、祭日であることから亡くなられた方のご家



族と一緒に供養をさせていただきます。夏の盂蘭盆法要もこれまで同様、暑い時期でご家族の皆様にはご多用で施設までおいでいただくのが難しいことから、園内の利用者や職員でもってお寺さまに来ていただき供養をさせていただきます。日々の方々の偲びながら感謝の念に浸る日としています。

今回の改築工事で創設者の故中道益平氏が手掛けた建物はすべて建て替えられましたが、創設者とともに歩んできた利用者、役員はたくさんあります。利用者や寄り添う支援、一人ひとりに応じた対応、利用者と共に歩む光道園精神をこれからも永遠に引き継いでいくために、「この度、「生きる」と「雑草に支えられて」の復刻版を発行し、全職員に配布致しました。

この「生きる」は、昭和五十一年の創立二〇周年記念事業の一環として、記念誌を発行しました。三人の職員が分担して、当時、元気でご健健でいらっしやいました故中道理事長が取り組まれてきた福祉事業に対する姿勢をまとめたもので、光道園を知る上で、また、故中道益平氏を理解する上で最もまとまっている内容となっています。光道園の職員としてお年寄りや障害者と関わっていく上で大切な事柄がたくさん述べられており、折に触れて読んでいただき、支援の一助にしていきたい

きたい一念で発行いたしました。

「雑草に支えられて」は中道氏が初めて発行した書籍で、中道氏ご自身の歩まれた半世紀と福祉事業を始めて一〇年経ったときの心境等が綴られたもので、発行部数も少なくこの書籍を持っていらっしゃる方もごく少数でもあり、当時の書籍を借りることができようやく復刻となりました。

今回復刻した書籍は、少し余分に印刷しましたので、ご希望の方がいらっしやいましたら事務局までお問い合わせください。



第九回光道園公開セミナー

平成二十二年三月六日（土）、朝日事業所で第九回光道園公開セミナーが開かれました。

今回は、東京から長寿社会開発センター常務理事の石黒秀喜氏をお招きし、「老い支度講座」を開催しました。



当日は雨模様
の天候でしたが、日頃お世話になって
いるボランティアの方や、
民生委員の方
にご参加頂
き、認知症に
ついての理解

や、先生自身の体験を踏まえたお話など、「老い」について丁寧に講演頂きました。

また、「上手に老いるための自己点検ノート」という、自分史、趣味やクセ、嗜好などを記入できるノートを参加者の方に配布させて頂きました。

先生のお話、点検ノートを通して、将来自分の望むような介護を受けるためには、自分（介護される側）も相手（介護する側）に自分のことを知ってもらおうとする気持ちは大切であると教えて頂きました。参加者の方からは、「夫婦で参加す

総務二課 松井祐美



れば良かった」「老いは避けて通れない部分だが、前向きに生活する術を教わった」などの感想を頂きました。「備えあれば憂いなし」というように、参加者の方からは「そろそろ準備しようかな…」という声も聞こえてきた一日でした。

「住み慣れた地域でいつまでも」

つながるケア 地域の拠点として

地域生活支援室 室長 山崎 ふみ子

地域生活支援室は地域の方々より身近なかかわりを持つ、5つの事業所があります。

通所介護事業所 デイサービスセンターさざんかホール、訪問介護事業所ヘルパーステーションさざんか、居宅介護支援事業所 さざんかホール。この3つの事業者は介護保険指定事業所で要介護認定を受けた方がご利用できます。また、地域の高齢者を対象に実態把握に歩いたり、生活の中の困りごとなどの相談に応じたり、介護予防教室などを推進したりする在宅介護支援センターさざんかホール。そして、地域の障がい者の方がたの制度に關することや困りごとなど様々な相談に対応する、越前町障害者支援センターさざんかがあります。この5つはそれぞれ別々のものとして存在するのでなく、地域の人を支援するにあたって連携を取り合っています。

たとえば、在宅介護支援センターが高齢者の実態把握に訪問した家で、おじいちゃんは足が弱って、一人でお風呂に入れず困っています。その息子さんは障がいがあつて働けずにいます。おばあちゃんはおじいちゃんの介護を抱えて困っていました。そこで在宅介護支援センターはおじいちゃんには介護保険の利用を勧め、居宅介護支援事業所に依頼、息子さんのご事情は障害者支援センターに相談、制度の説明や関係機関との連絡調整に

入ってもらいました。そして、おばあちゃんには介護予防として教室の参加を勧めました。このように連携をとって支援することはとても大事なことでと思っています。

さて、今回はデイサービスセンターでの過ごし方を通して介護保険の理念の一つである「自立支援」について考えたいと思います。

デイサービスセンターさざんかホールの一日は利用者のお迎えから始まります。「おはようございます。」の元気な声が広がります。うがい手洗いは定着してきました。なじみの顔に今日もあえて笑顔がほころびます。いつもの顔が見えないとみんなで体が悪いんでないかと心配されます。健康チェックの後、お風呂に入る人、リハビリをする人、好きな雑誌を読む人、ホールの手伝いをしてくれる人、お友達とおしゃべりを楽しむ人、テレビを見る人など、それぞれの過ごし方を楽しみます。昼食前は歯科衛生士の指導のもと口腔体操をし、おいしく食事が食べられるように、飲み込みがしっかりできるように訓練も欠かしません。昼食はその日によってメニューを選ぶこともできます。もちろんその方にあつたおかゆやソフト食などの食事形態も実施しています。

食後はやっぱり休憩。そのあと、朝入浴ができなかつた人は午後の入浴となります。また、午後

の活動も開始します。一人一人が楽しんで体も頭も動かせるようなことを工夫しながら行っています。ホール内ではリハビリで頑張っていることを生かせるように、車椅子から普通の椅子に座り替えたり、少しでも歩ける人は一緒に歩いたりしています。立ったり座ったりすることは、どんな人にとっても運動につながっています。私たちはそんな小さなことも大事にしたいと考えています。

楽しい時はあつという間に過ぎ、3時30分には家路に向かいます。

こんなさざんかホールを利用しているAさんのことを紹介します。

Aさんは脊柱管狭窄症と圧迫骨折で座位をとることもできず、ベッドから車椅子への移乗は二人かかりでした。排泄もおむつ内にするしかありませんでした。介護保険のサービスを利用するに当たり、Aさんは自分の思いを伝えました。

「座つてご飯を食べたい。」「排泄はおむつでなくトイレでしたい」

ケアマネはこの思いを目標に話し合いを開きま



した。本人、家族、医師、デイ職員、PT、ヘルパー、係わる人達が情報を共有し、同じ目標に向かって動きまです。Aさんの腰への負担や痛みに配慮しながら、リハビリを継続する状況は遠くはなれている娘さんたちにも伝えてきました。その甲斐あって車椅子での座位、トイレへの移乗が二人介助から一人の少しの手で介助を受けてできるようになりました。そのことはデイサービスだけのことでなく、Aさんの家へ訪問しているヘルパーにもつながっていきましました。

今、Aさんは歩行器を使って歩く練習をしています。それはAさんの大好きな愛猫に会いに行くために。

自立とはなんでも自分ひとりでできることではなく、介助を受けながらも自分らしく生きること。私たち地域生活支援室は、「その人らしく地域で生活すること」をチームケアで支援していきます。地域の拠点として。



地域の陶芸家の指導で、新商品製作開始

ライトワークセンター（セルフ課） 大林 康友



1月20日～2月12日（内の10日間）まで、ライトワークセンターの陶華星（陶芸部門）では、県の商品開発・作業工場等アドバイザー派遣事業によりプロの陶芸家近藤氏を招き、技術・知識を直に教えて頂くことになりました。

今回は事業を活かし、手作りの製品が出来ようになることを目標に、アドバイスを受けることにしました。まずは、作る製品選びです。陶華星の製品をより身近により愛用して頂ける物が良いだろうと考え、湯呑みを作ることにしました。作り方としては、近藤氏の指導の下試行錯誤した末、タタラ成形と呼ばれる技法で行うことになりました。タタラ成形とは、製品に使うある程度の大きさの粘土を用意し、その粘土を一定の厚さに切り揃えます。切り揃えた粘土を器を模った型に乗せ、表面をやさしく板で叩いて成形する技法です。

この技法を選んだ理由としては、視力障害者でも作れる方法という理由もありましたが、利用者の思いをより表面に表したい、また、より利用者の手のぬくもりを伝えたいという考えからこの方法を採用しました。

作る製品と作る方法が決まったので、いざ製作開始と思っていた矢先、表面を叩く板を持ってもらおうと思うのですが、上手く持つことが出来ず湯呑み作りまでたどり着けません。持ち易いように工夫をするのですが、頭では分かっているのに体がついてこない様子でした。それでも、利用者は新しい仕事を身に付けるために必死になって努力し、徐々に板を持てるようになり力強く叩けるようになりました。

練習を開始してから半月ほどかかって1つ製品が出来上がりました。本人口には出しませんでした。にんまりと自慢げに喜んでおられたので、この湯呑みは作った利用者へ渡し使って頂くことにしました。

『トントントン…』と、粘土を叩く軽快な音が陶芸室に響きます。本人も「この音や!」と、言われながらひとつひとつ思いを込めて叩いています。ある時ふと近藤氏より、「1つの製品を作るのに何回叩いているのかな?」と、投げかけられたのでカウントしてみることにしました。数えてみると、なんと2500回以上叩いていることが分かり、本人の手にはマメが出来ていました。本人及び製品から、この作業にかかる思いや製品にかかる思いがジーンと伝わってきました。また、この思いを多くの人に伝えたいと強く感じました。



今回、近藤氏を招きアドバイスを受ける中で、陶芸に関する技術や知識だけでなくものづくりの大切さや厳しさなど多くのことを教えて頂きました。また、その姿勢は利用者から学ぶことができました。これら学んだことや感じた思いを大きく膨らまし、利用者と一緒に製品としてカタチに変え、多くの方に伝えていきたいと考えています。

目指せ！おむつゼロ特養！

介護力向上講習会に参加して得たこと

第三光が丘ハウス（高齢福祉二課） 山田輝美



昨年度から参加を始めた「介護力向上講習会」。一年目は二階の職員が参加しました。その時三階ではあまり浸透せず、「寝たきりの方を歩かせるって？水分を沢山摂るって？下剤なしで自然排便できるかな？」という疑問だらけ。

そして二年目、自分が参加する事で「大丈夫かな」という気持ちでいっぱいでした。

五月、竹内孝仁先生による講習会が始まりました。基本は「水、メシ、クソ、運動」最終目標は「おむつゼロ特養」です。その中で歩行能力改善、認知症改善の取り組みもありました。

緊張感のある講習会で毎回、東京駅を下りると緊張が走りました。でも、おむつゼロを達成した施設は沢山ありました。

食事、入浴、排泄の介助は介護士でなくても誰だって出来る。介護士が求められることは何故おむつなのか？何故歩行出来ないのか？何故認知症が出るのかの原因を考えて取り組んでいく知識が必要。それを究明して実施し解決していく事でおむつも外れ、利用者の方の自立支援にも繋がるということ。その為には、利用者の入所経過や病歴、身体状況を良く知ることが大切です。

アセスメントをし、水分が足りなければ見直す、食事、歩行、日中の状態などを直すところからです。基本として水分は一五〇〇CC以上、食事は

普通食。下剤に頼らず毎日トイレに座り排便を促す。寝たきりにさせず歩きなさいという事で、水分摂取量（水分はその方の病気や体調、体の大きさで異なります）と下剤廃止への取り組みをまず行いました。（下剤は水様便になり、トイレに間に合わず自尊心を傷つけ認知症も進む）歩行も立位を取るところから始めました。食物繊維と薬草茶を毎日飲みトイレに座るようにしました。効果は直ぐには出ませんが続けていくことで、下剤なしでの自然排便になった方が増えました。職員も前向きに取り組んでくれたので、結果がでると一緒に感動しました。

普通の生活として「水、メシ、クソ、運動」の四拍子が揃ってくる事で、自分で食べる楽しみ、歩く喜び、又トイレにて気持ちよく排泄する事が「その人が、その人らしく」生活する為の自立支援に繋がる事をこの研修で学びました。歩行も認知症の軽減も同じです。その状況や症状に合わせて対応していく事で歩行が出来るようになり、認知症の症状をタイプ別に判断・対応する事で軽減する事が出来ました。

実際に歩行器を利用して歩行距離が伸びた方、道具を使わず歩けるようになった方、毎日トイレに座ることでの自然排便、座位も保て背筋がピンと伸び、良い表情で離床が出来るようになった

方が増えてきました。

昨年度からの取り組みで二階、三階の職員の介護に対する意識も変わってきました。利用者の方の様子がいとも違うと感じると「水分が足りないのかな？便秘かな？ご飯食べているかな？」と直ぐに問題を探ろうとする姿勢、職員が皆同じ方向に向いている事が「おむつゼロ」に近づいているのだと思います。

数年後には完全な二十四時間おむつゼロ！を実現できると良い。そして、成功した他施設のように「普通の生活をしていただけでおむつゼロになりました！」と言えるよう継続して取り組んでいきます。



毎朝皆でラジオ体操

待望の

エレベーター・ナースコール

光が丘ワークセンター（セルプ二課） 赤星 恵 吾



光が丘ワークセンターは今年度、障害者自立支援基盤整備事業として、福井県からの補助が内定しました。障害者自立支援基盤整備事業は、自立支援法に基づく施設入所支援、生活介護、就労移行支援、就労継続支援B型事業に移行する場合等に必要となる施設の改修等の経費に対し助成を行うことにより、障害者自立支援法に基づく障害福祉サービスの基盤整備を図ることを目的としてい

ます。

その事業として、施設全体のナースコールの新設、十一人乗りのエレベーター、耐震補強、トイレ改修工事で二千万円を限度に補助予定で、二千万円を超える分は自己資金を投入することになりました。

光が丘ワークセンターは、昭和五十六年の開設以来二十八年を経過しています。当施設を利用されている方々は、現在数五十二名で平均年齢は五十五・九歳。六十歳以上が十七人、七十歳以上が八人、八十歳以上が一人と加齢化による重度化も顕著に表れています。

ほとんどの利用者は、重度の重複障害であり、各種支援や援助を受けながら自立した生活を目指して頑張っておられますが、車椅子利用者や歩行不安な方がおられ、また、施設においても車椅子等移動介助の必要な方の相談が増えてきており、エレベーターがない為一階に限定され、利用者間の交流にも支障をきたすようになってきていました。

また、ナースコールも設置されていなかった為、糖尿病による低血糖や喘息発作、てんかん等、緊急時の対応の遅れも懸念され、利用者からも、日々の日常生活に対する不安の声もありました。

私は、光が丘ワークセンターの前にライトホー

プセンターの援護二課にいました。そこでは、当たり前のように使用していたナースコールやエレベーターでしたが、光が丘ワークセンターに配属されその二つがないことに驚きました。

エレベーターが完成して、エレベーターを利用する利用者や、運動の為にエレベーターを利用せずに階段を利用する利用者とは様々ですが、車椅子等を使用する利用者にとっては、待望のエレベーターだと思っています。

さらにナースコールも完成し、緊急時での対応も万全になりましたし、利用者・職員共に安心が一つ増えたと思います。

この工事で利用者が、安全・安心な生活が送れるよう、エレベーター、ナースコールだけではなく、私達職員の支援でも利用者を支えていきたいです。



タイムン たいのしい

ライフトレーニングセンター

たねのいえ（療護一課） 岩 尾 拓



「楽しそう」とか「楽しい」は偉大です。

老人施設で働く友人が、あるとき「施設のお年よりみんなで、京都旅行に行きましょう。」と施設でのイベントを計画したそうです。楽しそうなイベントです。同時に、スタッフとして大変なこともあります。スタッフ人数は足りるのか？病人がでたらどうする？などなど・・・

細かく考え出すと、色々な大変さが出てきます。そして、時には色々な大変さがスタッフを不安にさせてしまいます。そんな大変さとスタッフの不安で京都旅行の計画もなかなか進みません。あるとき、友人はあるスタッフに言われました。

「何で旅行なんて計画を考えるんだ。大変じゃないか。」

それに対して友人は一言こう答えます。

「だってね。楽しそうじゃないですか。」

「楽しそう」と説明するだけでは、大変さもスタッフの不安も解決しません。しかし、その後も友人は他のスタッフに対して「楽しそう」としか説明をしなかったといいます。大雑把な友人です。でも、熱意ある友人でもあります。友人が「楽しそう」と根気よく言い続けることで、徐々に施設の空気が変わります。お年よりは「参加したい」と思い、スタッフも「大変だけど楽しそうだからがんばりたい」と次第に思っていたのでしょうか。結局、後日、お年よりもスタッフも、みんな楽しく京都旅行に行ってきたそうです。大変さを「楽しそう」で乗り切ってしまった友人の施設でのお話です。

私の施設では先日、そり遊びに行ってきました。一年間で様々あるイベントのなかで、「一番大変で、一番楽しいイベント」です。利用者、お母さん方、スタッフ、ボランティアさん、みんなでバスに乗ってスキー場へ向かいます。スキー場の広いゲレンデで滑るそり遊びは非常に楽しいものです。利用者も、スタッフも雪まみれになって滑っては大笑い、転んでは大笑い。

当日は雪が降っていたり、スキー場は階段ばかりで車いすの方の移動が困難だったり大変なこともあります。しかし、色々な大変さのなかにも楽しい事がいっぱいあります。

雪の降り続けるゲレンデで、お互いの真っ白い姿を見て笑いあったり、体に付いた雪を払いあったりすることも楽しい体験です。長い階段や、雪のゲレンデを移動することも、「頑張ったね。」「上ったね。」と言って、利用者とともに笑いあえます。長い雪道では、日ごろ歩くりハビリをしている人が、その成果を発揮して職員に支えられて歩くことができました。大変な雪道だからこそできる経験です。

「一番大変で、一番楽しいイベント」でも大変だからこそ楽しいのだと思います。

大変さも楽しんできた、たいへん「楽しい」私の施設でのお話です。



施設内研修を通じて

自分の未熟さを映し出す鏡

ライトホープセンター（援護二課） 吉田正樹

ライトホープセンターでは、年に一回外部の講師を招いて研修を実施しています。昨年の八月には、施設でお世話になっている清水クリーニング店の清水美孝氏を招いて、「親としての思い」

息子との係わりと「こころ」の活動を通じて」というテーマで、お話をいただきました。

障がいを持つ息子さんとの係わりの中で親として大切にしてきたこと、係わりの中で感じたこと、これからへの思いを率直に語っていただきました。

研修後の感想の中には、

●子育ても仕事も人の係わりは、観察、記録、寄り添い、笑顔なのだと思んだ。自分の仕事はもちろん子育ての中でも出来るだけ実行できるような心がけたい。

●講師の「子育てが楽しい。」という言葉聞いて、自分にとっては何が嬉しいか、もう一度自分自身を振り返ってみたい。

●「相手に三回言ってもわからないときは、英語を話しているようなもの。」という講師の話聞いて、自分の担当者にきちんと分かるように話しているか？と痛感した。

●考えるだけではなく、実際に「こころ」という喫茶店を立ち上げるなど色々な面で活動を実践し、様々な社会資源を作り上げてきた実行力が素晴らしいと思った。息子さんだけではなく、他の障がい者の支援にもその経験を結び付けていることが感動した。

という声が実際に話を聞いた職員から寄せられました。

私たちは、利用者をはじめ、身元の方々、ボランティアの方々など様々な人たちと係わり、ふれあいを持つことが仕事です。単に機械的に介護や支援をすることが仕事ではありません。様々な介護や支援を通じて人とふれあいながら、共にいる時間、を共有する仕事であると思っています。

そのために、常に相手の立場を尊重する「寄り添う」ということが求められています。「目の前にいる人は、何を求めているのか？」その人の本音

や心の核心を理解しようとする姿勢が大切だと言われています。実際に人と係わっている中で、常にこうした姿勢でいることができればいいのですが、「言いつは易し、行つは難し」という格言のとおり、なかなかできていないのが現状です。そんな時に今回のような研修に参加すると、改めて自分の未熟さに気付かされます。

日々の日常の中では気がつかないことも、外部の方の目に曝されることではっきりと見えてくることもありま

す。

私たちにとって外部の講師や目の前の利用者は、自分の仕事に対する姿勢や思いを映し出す鏡のような存在です。私たちは未熟な自分自身の姿や心を、彼らが語る様々な思いの中からまるで鏡を見ているように垣間見ることがあります。それは、その人自身に直接語ってもらった、その人自身の生の声をきくことで見えてくるものでもあると思つたのです。

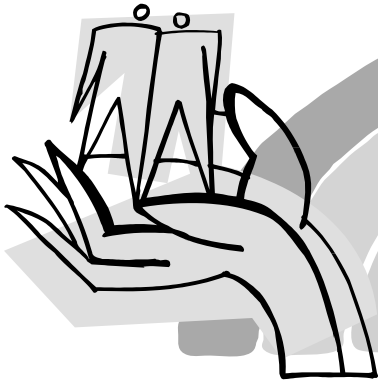
本や論文等の文章からも色々な知識や経験を学ぶことはできるでしょう。しかし、人柄、温かさや熱意などは



はりその人に接することでしか感じる事ができないものもあります。外部から講師を招いて研修をするということは、こうした様々な面で大きなメリットがあります。それは、「公開セミナー」や「生活支援事例報告会」でも大切にしている目的の一つではないでしょうか。

清水氏の語りの中から私たちはたくさんのお話を学びました。自分自身の事であったり、自分の担当している利用者の事であったり、自分の業務の内容であったり、その内容は一人一人違います。しかし、その思いは共通していると思えます。寄せ

られた職員の感想には、「みんなの幸せを願う思いが表れており、自分自身の幸せだけではなく、利用者をはじめとしたその周りにいる人たちの幸せの為に頑張ろうと思っているのではないのでしょうか。私もこうした皆さんとともに、これからも未熟な自分自身を振り返りつつ、利用者をはじめとした皆さんの幸せを探しを追求していくためにも頑張っていきたいと思えます。」



ボランティアとの絆シリーズ⑤

個人ボランティア

小山 巧

私は、現在71歳で、鯖江市つつじヶ丘町に住んでいます。工員退職後、平成19年10月26日に県へボランティアの登録をし、冬期ボランティア体験に応募し、光道園たねのいえで活動させてもらって以来今日に至ります。その時の職員・渡邊さん始め数名の職員とお目にかかりました。

活動の内容は週1回の他毎月の行事です。創作・散歩・見守り・外出やピクニック時の付添い、お茶の手伝い、ゲームなど楽しくコミュニケーションを利用者の方とらせてもらっています。私は他に交流の場をもっており、鯖江市ボランティア連絡協議会と福井市社会福祉協議会の開催する会場へ出向いで交流しています。そこで、昨年横沢さんという方との出会いがあり、たねのいえの事を伝え、二人で一芸を披露したこともあります。私は、多くの利用者の方と職員の方のもとで楽しく活動をさせてもらっています。



これからも他のボランティアグループの活動も見習って良い所は取り入れて利用者の方の期待に添えるように致します。この先も講演を聞いて良いボランティアになりますことをお誓いします。

ボランティア活動を継続するための10つのポイント

1. 自分にあった身のまわりのことから
2. 細く、長く、無理をしないで
3. プライバシーを守る
4. 相手のニーズに合った活動を
5. 言葉遣いも大切に
6. 学習・情報交換も大切
7. 活動を振り返り、記録をとろう
8. 家族や職場、学校の理解を得よう
9. 心配なことは相談しよう
10. 安全にも気配りを

～全国社会福祉協議会の冊子より引用～



平成二十一年度 生活支援事例報告会

企画調整室 清水 亜紀

光道園では毎月一回重複障害講座という名の職員研修があります。各課から一名職員が参加し、福井大学の松木先生にアドバイスをいただきながら、利用者の方とのかかわりや様々な思いを話し、話すことで自分を振り返って見つめなおしていく機会となっています。

その集大成である生活支援事例報告会が三月三日（水）～五日（金）に開催されました。



福井大学石井先生、中村先生、県立大学の小林先生、上越教育大学の土谷先生、測辺先生に助言者としてお越しいただき、これからの支援に結びついていく丁寧なご助言をたくさん頂きました。また光道園の職員他県内の施設の方、学校の先生、また県外からの大学の先生と学生さんの大勢のご参加をいただき、『もっと知りたい。かかわ



りたい』という発表者の思いが、会場の皆さんと共有できたひとときだったと思います。職員の方の素直な喜びを共有でき、利用者の方の一瞬の仕草や笑顔、小さな一言に新しい係わりを見つけ出す楽しさを感じました。本当にみなさんお疲れ様でした。そして有り難うございました。

ご助言いただいた先生のお言葉です。『係わる中でわかっていく、一緒にすることでもわかり合える。様々な応答がより多ければ多いほどまた繊細であればあるほどより相手を知ることができる。知る為には丁寧に係わらなければならぬ』

新任職員の紹介

平成二十一年十二月～二十二年二月採用

- ★氏名
- ①血液型
 - ②星座
 - ③趣味
 - ④好きな曲

■鯖江事業所

総務一課

富田 知里

- ①A型
- ②かたご座
- ③旅行
- ④みんな空の下

セルフ一課

林 千明

- ①O型
- ②おとめ座
- ③読書、映画鑑賞、トレッキング
- ④NHK・FM

療護一課

山岸 通代

- ①O型
- ②みずがめ座
- ③携帯小説を読む、キャンプ
- ④春夏秋冬（ヒルクライム）

近藤 貴

- ①A型
- ②やぎ座
- ③バレーボール・ゴルフ・釣り日曜大工
- ④B、Zの曲全般

療護一課

泉 りつ子

- ①B型
- ②おうし座
- ③ソフトボール、スポーツ観戦
- ④手紙（アンジエラ・アキ）、ファンキーモンキーベイビーズの曲
- ゆずの曲

■朝日事業所

高齢福祉一課

門前 美穂

- ①AB型
- ②双子座
- ③映画を見ること
- ④Bad day
- ～ついでにない日の歌～

小玉 典子

- ①A型
- ②みずがめ座
- ③映画鑑賞
- ④EXILEの曲全般





笑顔がいっぱい!

社会福祉法人 光道園の施設

社会福祉法人 光道園 法人本部	鯖江市和田町 9-1-1	養護老人ホーム・第一光が丘ハウス	丹生郡越前町朝日 22-7-1
障害者支援施設・ライトワークセンター	鯖江市和田町 9-1-1	養護(盲)老人ホーム・第二光が丘ハウス	丹生郡越前町朝日 22-7-1
障害者支援施設・光が丘ワークセンター	丹生郡越前町朝日 22-2-2	特別養護老人ホーム・第三光が丘ハウス	丹生郡越前町朝日 22-7-1
障害者支援施設・ライトホープセンター	丹生郡越前町朝日 22-3-1	通所介護事業所・ デイサービスセンターさざんかホール	丹生郡越前町朝日 22-7-1
障害者支援施設・ライフレーニングセンター	鯖江市和田町 9-1-1	訪問介護事業所・ヘルパーステーションさざんか	丹生郡越前町朝日 22-7-1
日中生活介護事業・たねのいえ	鯖江市和田町 9-1-1	居宅介護支援事業所・さざんかホール	丹生郡越前町朝日 22-7-1
		越前町障害者支援センター・さざんか	丹生郡越前町朝日 22-7-1